

原著

乳児とのふれあい体験が大学生へもたらす意識の変化

小谷 博子¹⁾

The Influence of Students' Experience of Contacts with
Infants on their Behavior toward Parenting

Hiroko Kotani

要 約

本研究では、赤ちゃんふれあい体験学習を実施し、体験の前後に彼らの子育てのイメージがどのように変化するかについて調査することを目的に研究を行った。大学生を対象に、赤ちゃんふれあい体験を実施前後で自己意識について自記式質問紙調査が行われ、*t*検定による分析がなされた。その結果、対児感情においてふれあい体験前後で回避項目と接近項目の両方に有意な差が認められた。また、親準備性尺度についてもふれあい体験前後で「乳幼児への好意感情」「育児機会」「育児への自信」に有意な差が認められた。乳幼児と接する機会を意識的に増やしていくことは、将来、親となる世代が子どもや家庭を知ることになり、子どもとともに育つ機会を得ることで人への関心や共感力を高めることに繋がる可能性が示唆された。

キーワード：乳幼児、子育て、ふれあい体験、大学生

1. 問題と目的

厚生労働省によれば、2022年の出生数は77,747人で、1899年の統計開始以来、初めて80万人を割り込み、過去最少を更新した。一人の女性が生涯に産む子どもの推計人数を示す「合計特殊出生率」は、1947年以降で最低の1.26であった。80万人を下まわるのは時間の問題と言われていたが、新型コロナウイルスの感染拡大は思わぬ形で私たちに大きな影響をもたらし、少子高齢化が一気に加速している。

国立社会保障・人口問題研究所の2022年の調査によると、18～34歳の未婚者のうち「赤ちゃんや

小さい子どもとふれあう機会がよくあった（よくある）」にあてはまらないとした割合は、男女とも過半数を超え、前回2015年の調査より増加している。また、中学生や高校生を対象とした意識調査によると、小さな子ども（小学校に入る前の乳幼児）と「触れ合う機会はない」と回答した生徒の割合は、72.7%となっており、高校生に限ると、82.2%と高い水準になっている（三菱UFJリサーチ&コンサルティング, 2014）。少子化が深刻化する現代において、乳幼児とふれあう経験を持ちにくくなっているといえる。

昭和44年以降の中学の保育学習の目的の柱は「子どもへの関心を高める」ことであった（伊藤,

1) 小谷 博子 東京未来大学 (Tokyo Future University) kotani-hiroko@tokyomirai.jp

2003)。少子化が進んでいることから中学生が乳幼児と関わるのが難しくなり、中学生の保育学習への意欲の低さに繋がってしまっている。学生が自身よりも年齢が下の子どもと関わるができる場面は、学校外の地域での関係が中心となる。学生は若ければ若いほど様々な年齢の人と関わる機会が多くなる。地域のイベントや近所の公園での交流など年下から自身より遥かに年上の大人とも関わりを持つことができる。小学校時代は近所の子どもや親戚の子どもとの遊びが大半を占めている。自分とほぼ同じくらいの子どもの遊べる機会があるが、年を重ねるごとに世代間での交流が減り始める。年齢を重ねることにより乳幼児や児童と年齢が大きく離れることで関わりを持てる場が減少してくる。中学、高校では授業やボランティアなどで子どもと接する機会があるが、大学生時代は意図的に行わなければ乳幼児の世話や遊びの機会が最も少ない時代といえよう(金谷, 2008)。

現在の日本の問題として、少子化と子育ての困難さが挙げられる。育児という行為は、先天的に組み込まれた行動ではなく、学習性のものであることから、育児不安を訴える母親や幼児虐待の背景に、親になる以前の乳幼児との接触経験の不足があることが指摘されることも少なくない。以前は、兄弟の世話や地域の子どもの交流から自然に身につけていたが、子どもとの接し方がわからないまま親になる人が増えている。このことが幼児への理解ができず、子育てに困難を抱え、虐待に繋がってしまう可能性がある。

母親の育児不安が大きくなると、親子関係の不安的にも繋がりがやすくなる。親と子との関係がうまく行かないと、子どもが成長するについて、子ども同士の関わりにも問題が生じ、いじめや学校不適応や反社会的行動などが児童期や青年期に問題となる可能性がある。

原田(2006)は、育児という行為は第一子よりも、第二子・第三子と経験を積んだ方が「赤ちゃんが何を要求しているのか」についての理解が進み、子育

てに自信がもてるという学習性の要素も強いと述べている。加えて、自分の子どもだけではなく、他者の子どもであっても「接触経験」や「育児経験」を出産前にもつことができれば、自身の子育ての際、子どもの要求への理解が進み、精神的に安定し、育児を楽しめる割合が高いことも明らかになっている(原田, 2006)。

国立青少年教育振興機構が発表した「若者の結婚観・子育て観等に関する調査」によれば、赤ちゃんや小さい子どもと触れ合う機会が多かった人は、そうでない人に比べて結婚意欲が高く、希望する子どもの数が多いと報告されている。

また、小学校の時までに近所の小さい子どもと遊ぶなどの地域活動の経験が多かった人は、そうでない人に比べて結婚や子育て願望が強いという調査結果もあり、子どもを持つ前の若者に乳幼児とのふれあいや育児の経験をもたせることは、少子化対策への効果を期待でき、その価値は大きいと考えられる。

2023年5月にWHOが発表した世界保健統計によると、世界全体の総人口は約80万人であり、日本の総人口は約1億2461万人で、日本は13年連続で総人口が減少している。特に、15歳未満人口(年少人口)は1450万3千人で、前年に比べ28万2千人の減少となり、総人口に占める割合は11.6%で過去最低となっている。このように少子化が進むことによって乳児を連れた外出に適した環境が少なくなっており、子育てが今以上に困難になると予想される。少子高齢化社会において若者が子どもと接触することが若者にどのような発達をもたらすか、またその発達のためにどのような支援や教育プログラムが可能かを探ることが必要である(金谷, 2008)。

この問題を解決に導くために私たちは、子育てへの周りの理解が必要なのではないかと考える。著者は、2012年度から都内大学で乳幼児ふれあい体験事業を実施している。大学内で乳幼児向けコンサートや学内のプレイルームにおいて赤ちゃん広場を開催することで、ふれあい体験に協力して下さる乳幼児親子の確保も行っている。

本研究では、乳幼児とのふれあい体験学習を接触経験の不足を補う働きをするものと考え、親になる前の若い世代である大学生を対象に赤ちゃんふれあい体験学習を実施し、学習の前後に彼らの子育てのイメージがどのように変化するかについて調査することを目的に研究を行った。

2. 方法

1) 調査対象

大学生43名（男性14名、女性29名、平均年齢18.76歳、標準偏差0.6）

2) 協力者

都内大学のゼミで行っているプレイルーム開放時に来校して頂いている近隣に在住の母子6組に学生とのふれあい授業に参加して頂いた。乳児の年齢は4～8ヶ月であり、母親は全員が30代であった。

3) 乳児と学生のふれあい体験の方法

大学内のプレイルームという子どもが安心して遊べる部屋において学生と乳幼児の交流を行った。各班3～5人に対して親子1組がローテーションで入れ替わっていくようにし様々な乳幼児と関わってもらうこととした（図1, 2）。

4) 質問紙の構成

質問紙で事前調査を行い、一カ月後にふれあい体験を行った後に同じ内容で事後調査を行った。ふれあい体験の前後で結果を比べるため、自身の携帯番号の下4桁の入力を依頼し、照らし合わせができるようにした。質問項目は次の通りである。

(1) 乳児とふれあう機会の有無について

「はい」と回答した学生には具体的な内容についても記述方式で尋ねた。

(2) 対児感情尺度

この対児感情尺度（花沢, 1992）は「あたたかい」「さみしい」等、さまざまな形容詞について乳児に対するイメージのあてはまる程度を回答するものであり、乳児を肯定し受容する方向の感情である愛着的な感情といえる接近感情の程度を表す「接近項目」と、乳児を否定し拒否する方向の感情である嫌悪的



図1 ふれあい体験の様子



図2 ふれあい体験の様子（双子のケース）

な感情といえる回避感情の程度を表す「回避項目」からなる。赤ちゃんを思い浮かべた時に「かわいい」「怖い」などの形容詞の言葉に対してどの程度当てはまるか、「よく当てはまる」（3点）から「全く当てはまらない」（0点）の4件法で回答を求めた。

(3) 親準備性尺度

親準備性とは、子どもに対する親としての役割を遂行するために必要な資質や準備性を意味する。親準備性尺度（佐々木, 2007）は、乳幼児への好意感情（9項目）と育児への積極性（13項目）からなり、それぞれよく当てはまる（5点）から全く当てはまらない（0点）の5件法で回答を求めた。

(4) 親準備教育に関する項目

親準備教育に関する項目（川瀬, 2010）は、育児機会（2項目）、育児への自信（4項目）、親になる

イメージ（2項目）の8つから成る。それぞれよく当てはまる（5点）から全く当てはまらない（0点）の5件法で回答を求めた。

3. 結果

1) 乳幼児の関わり経験の有無について

ふれあい学習を行う前から乳幼児と関わりをもったことがあるかどうかを調査したところ、「あり」が82.4%（35名）、「なし」が18.6%（8名）という結果であった。

次に経験がある人に対して具体的にどのような関わりを持ったことがあるかどうか記述式で回答してもらったところ、「兄弟や親戚関係」が55.8%（24名）と一番多く、次に「ボランティア・アルバイト」が30.2%（13名）、その他が20.9%（9名）であった。その他の具体例としては、「近所の子どもと遊んだ」「友達の兄弟」「卒園した保育園に行った」などの記述がみられた。

2) 対児感情尺における分析結果

対児感情尺度について、ふれあい体験の前後で同じ内容の質問を行った。接近項目と回避項目に分けて前後の差をt検定で分析した（表1，図3）。回避項目（ $t(42) = 2.20, p = .03$ ）と接近項目（ $t(42) = 2.16, p = .04$ ）の両方に1%水準で有意な差が認められた。また、質問ごとに数値を出してみた結果、「うるさい（ $t(42) = 2.75, p = .01$ ）」と「よわよわしい（ $t(42) = 2.83, p = .01$ ）」では1%水準で有意な差が認められた。さらに「ういういしい（ $t(42) = 2.03, p = .05$ ）」「あまい（ $t(42) = 2.05, p = .05$ ）」「うつくしい（ $t(42) = 2.06, p = .05$ ）」「こわい（ $t(42) = 2.06, p = .05$ ）」で5%水準の有意な差が認められた（図4）。

3) 親準備性尺度の分析結果

次に親準備性尺度について、ふれあい体験の前後で同じ内容の質問を行った。質問内容は「乳幼児への好意感情」「育児への積極性」「育児機会」「育児への自信」「親になるイメージ」の5つであり、5段階に分けて前後の差をt検定で分析を行った（表2）。「乳幼児への好意感情（ $t(42) = 2.33, p = .02$ ）」

表1 ふれあい体験前後における対児感情尺度の比較

	体験前 (N=43)		体験後 (N=43)		t 値	自由度	p 値	
	平均	SD	平均	SD				
回避項目	9.37	7.22	7.93	6.02	2.2	42	0.03	**
接近項目	29.55	8.04	31.13	7.51	-2.16	42	0.04	**

注) ** $p < .01$

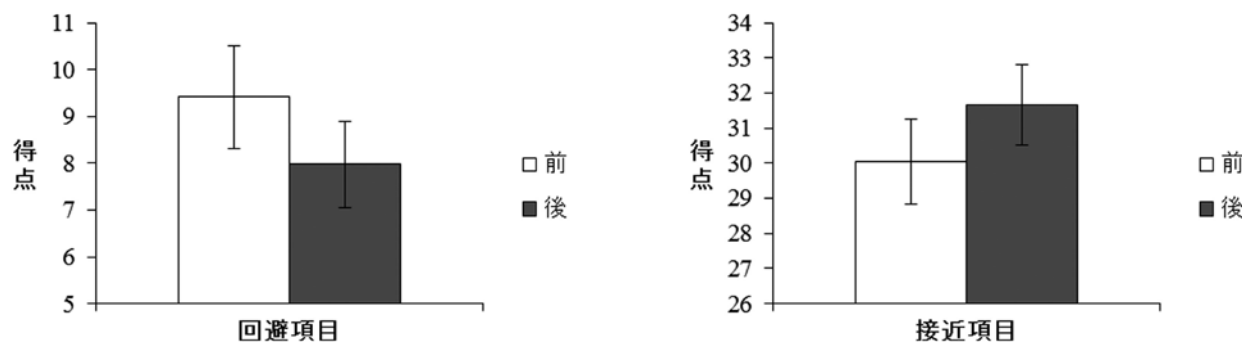


図3 ふれあい体験前後における対児感情尺度の比較

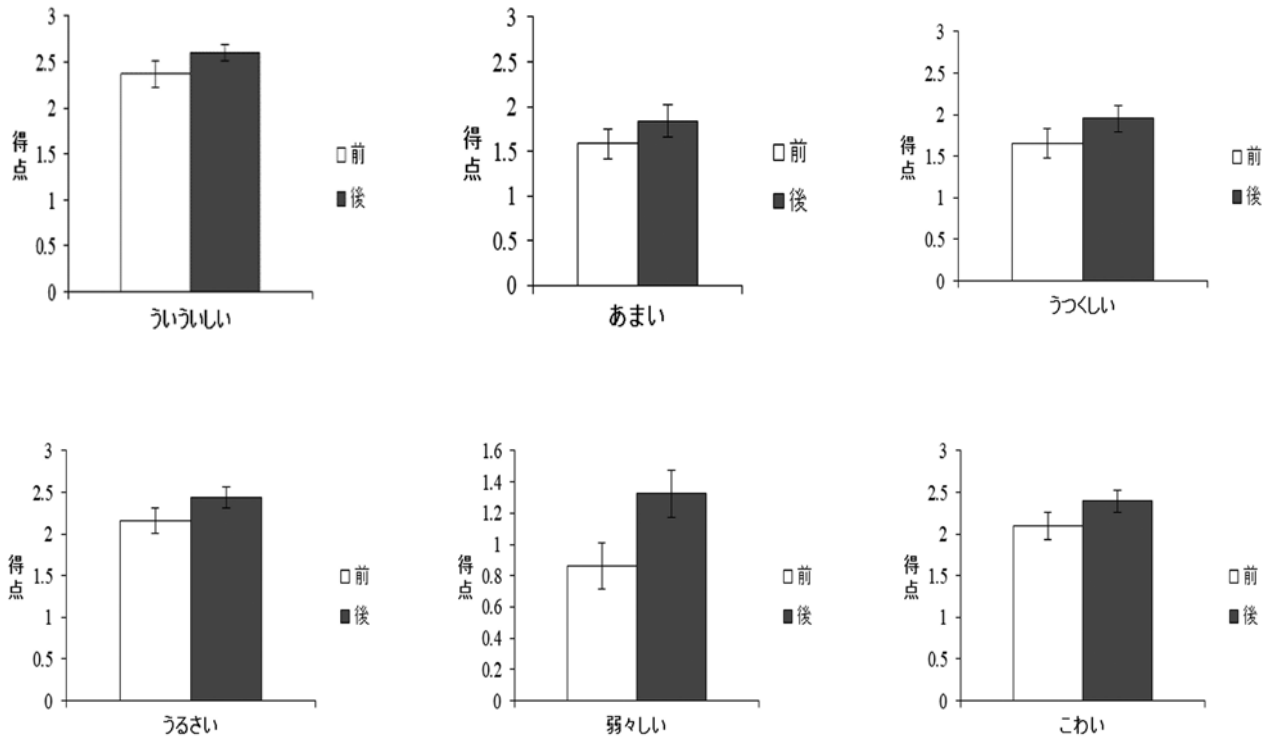


図4 ふれあい体験前後における対児感情尺度の比較
(有意差の生じた項目のみ)

表2 ふれあい体験前後における親準備性尺度の関係

	体験前 (N=43)		体験後 (N=43)		t 値	自由度	p 値	
	平均	SD	平均	SD				
乳幼児への好意感情	41.21	5.35	42.35	3.92	-2.33	42	0.02	**
育児への積極性	48.58	4.83	49	4.91	-0.6	42	0.55	
育児機会	3.09	3.09	3.86	2.42	-2.76	42	0.01	**
育児への自信	9.79	3.7	10.72	4.48	-2.03	42	0.05	*
親になるイメージ	5.51	2.44	5.98	2.68	-1.32	42	0.19	

注) ** $p < .01$, * $p < .05$

と「育児機会 ($t(42) = 2.76, p = .01$)」の2つには1%水準で有意な差が認められた。また、「育児への自信 ($t(42) = 2.03, p = .05$)」からも5%水準で有意な差が認められた (図5)。

さらに細かく1つ1つの質問に対して変化を見るために質問ごとにt検定を行った。1%水準で有意な差がみられたのは、「育児は人の生きがいだと思う ($t(42) = 2.78, p = .01$)」と「自分も育児をやってみたい ($t(42) = 3.41, p = .04$)」と「普段の生活

の中で、子どもをあやしたり、おむつを替えたりするなど、乳幼児の世話をすることがある ($t(42) = 2.76, p = .01$)」であった。また、5%水準で有意な差が認められたのは、「育児をしていると、自分の好きなことができないと思う ($t(42) = 2.34, p = .02$)」と「赤ちゃんのことにについて知りたいと思う ($t(42) = 2.24, p = .03$)」と「育児は辛い仕事だと思う ($t(42) = 2.14, p = .04$)」であった (図6)。

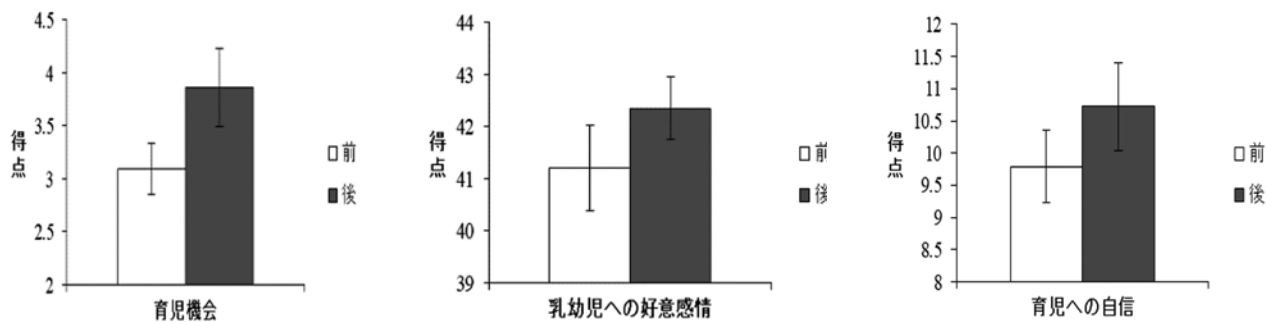


図5 ふれあい体験前後における親準備性尺度の比較
(有意差の生じた項目のみ)

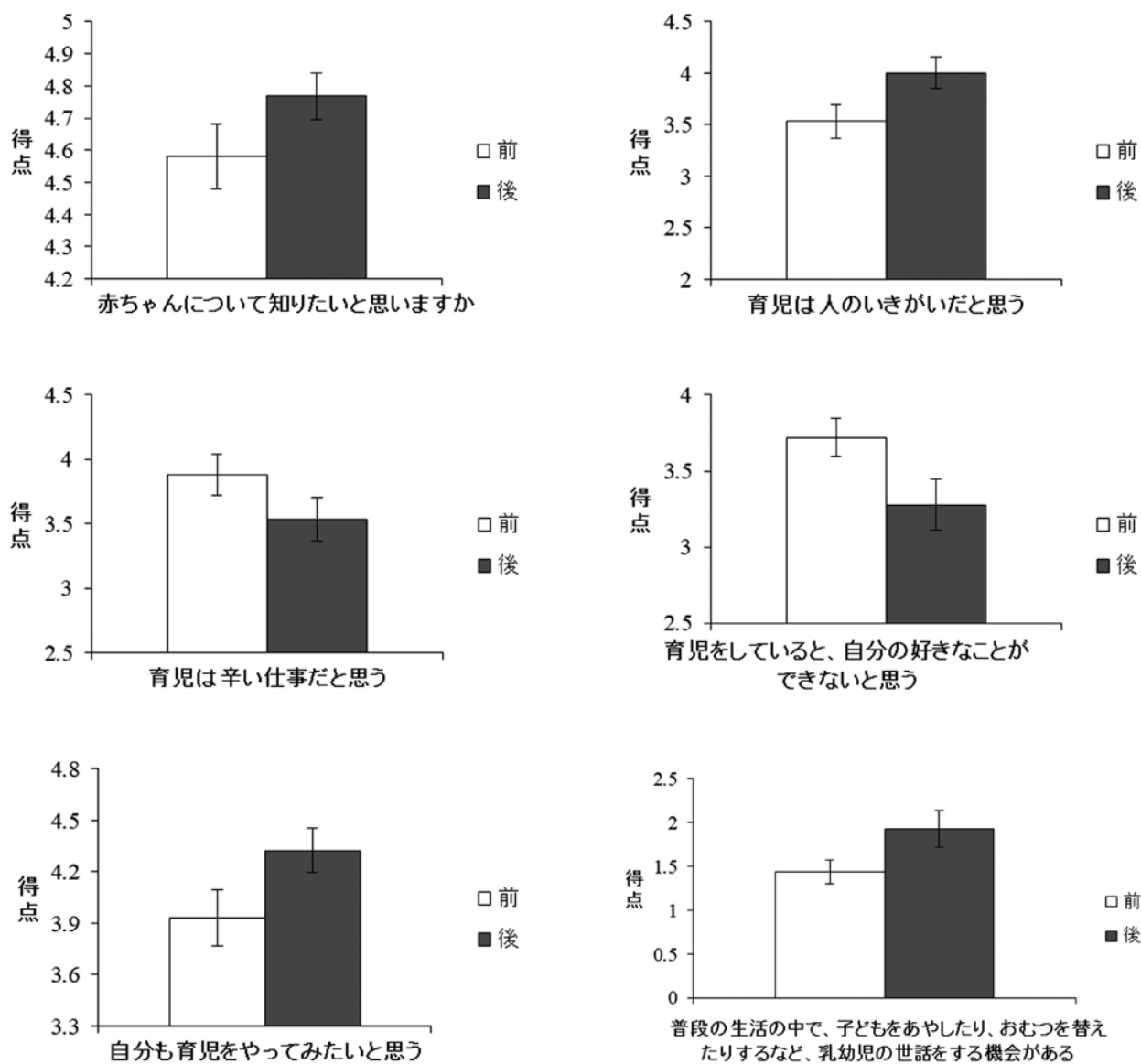


図6 ふれあい体験前後における親準備教育の項目別比較
(有意差の生じた項目のみ)

表3 乳幼児との関わり経験の有無と項目別の分散分析結果

	関わりあり (N=36)				関わりなし (N=9)				関わり	時期	交互作用		
	前		後		前		後						
	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD					
回避項目	8.71	7.13	7.29	6.04	12.11	7.32	10.56	5.5	2.05	3.32	0.93		
接近項目	30.47	8.28	32.21	7.53	28.44	7.28	29.67	7.53	0.68	2.48	0.79		
乳幼児への好意感情	42.85	3.21	42.91	3.38	35	7.28	36.72	5.21	13.11	**	33.43	**	0.01
育児への積極性	49.15	4.96	49.12	5.19	46.44	3.84	48.56	3.91	1.03	1.47	0.22		
育児機会	3.15	1.69	4.15	2.56	2.89	1.17	2.78	1.39	1.42	1.76	0.1		
育児への自信	10.68	3.53	11.53	4.5	6.44	2.13	7.67	2.96	9.59	**	3.33	0.75	
親になるイメージ	5.94	2.34	6.56	2.54	3.89	2.2	3.78	2.05	9.57	**	0.34	0.41	

注) ** $p < .01$

4) 乳幼児との関わり体験の有無による比較検討

対児感情尺度と親準備性尺度に関する項目全てで分散分析を行った(表3)。その結果、対児感情尺度では有意な差は認められなかったが、親準備性尺度では、乳児への好意感情では関わりと時期の主効果にて1%水準で有意な差が認められた。関わりの主効果 ($F(1, 41) = 13.11, p = .001$)、時期の主効果 ($F(1, 41) = 33.43, p = .000$)。親準備教育に関する項目では、育児への自信と親になるイメージから関わりの主効果にて1%水準で有意な差が認められた。育児への自信の中の関わりの主効果 ($F(1, 41) = 9.59, p = .004$) 親になるイメージの中の関わりの主効果 ($F(1, 41) = 9.57, p = .004$)。

また、乳児への好意感情に関しては交互作用にも有意な差が認められた ($F(1, 41) = 41.338, p = .000$)。

5) 関わり体験の自由記述

乳児とのふれあい体験を経験したあと、どのように感じたのかを自由に記述してもらい、記載された感想を肯定的な感情と否定的な感情に分けて表4に記載した。

肯定的な感想について、その内容から①乳幼児の存在②乳幼児の応答③母親のかかわりの三つに分類した。一つ目の乳幼児の存在では、「赤ちゃんはかわいいし、面白いと思った」「赤ちゃんの笑顔で幸せな気持ちになる」といった乳幼児の存在そのものを肯定的に感じたということであった。二つ目の乳

表4 乳幼児とのふれあい体験の感想

	自由記述 (抜粋)
否定的な感情	・泣くのをやめさせるなどとても大変そうだと感じた。
	・赤ちゃんのことをよく知ることはなかなか難しいなと思いました。
	・ごはんを最近食べなくなってしまってどこでもおっぱいを求めてぐずってしまうのでどうしたらいいかわからないという話を聞いて子育ての難しさを感じた。
乳幼児の存在	・育児はとても大変だと感じました。
	・赤ちゃんはかわいいし、面白いと思った。
	・実際に授業で学んだことが目の前で見てみるととても勉強になり、より赤ちゃんについて知ってみたくと思った。
乳幼児の応答	・子育ては辛いこともあるけれど、赤ちゃんの笑顔で幸せな気持ちになりました。
	・大変なことも苦労もたくさんあるけれど、その子どもは希望だということ。そして与えてくれるものがたくさんあるということが分かった。
	・日々の成長を感じるし、一人一人成長のスピードも変わると感じられた。
肯定的な感情	・ものを壊したりこぼしたりなどやっぱり子育ては大変なんだなと思いました、赤ちゃんはかわいいなと思った。
	・歯が生えはじめていてよだれが大変みたいです。人見知りがなくすごくかわいかったです。音に反応してくれたり、手を振ってくれたりしてうれしかったです。
	・赤ちゃんが「アー」「ウー」と言っていたのがすごくかわいかった。
母親の関わり	・成長によって一人一人違うのだとわかった〇〇ができるようになった! など少しずつ何かができるようになる成長過程をみていくのが楽しそうでした。
	・育児は苦労するものであるが、非常に充実した日々を過ごせるようになるのもという印象を受けました。
	・普段赤ちゃんに関わることがないので、ママたちのお話を聞くことができただけでも勉強になりました。
母の関わり	・自分が小さいときに母がどんな苦労をしていたか少しわかったような気がした。
	・ママは赤ちゃんのこと自分よりも大切にしているんだと心から感じた。
	・私も子どもがほしいと思った。そして、もっと赤ちゃんに触れ合うボランティアに行きたいと思った。
母の関わり	・育児は大変そうだけど育児をしているママは楽しそうだった。

幼児の応答では「音に反応してくれたり、手を振ってくれたりしてうれしかったです。」「赤ちゃんがアー、ウーと言っていたのがすごくかわかった」などといった記述が見られ、学生たちの言葉がけや働きがけに対して、乳幼児が応えてくれたといた。三つ目は母親のかかわりにおいては「ママは赤ちゃんのことを自分よりも大切にしているんだなと心から感じた。」「育児は大変そうだけど育児をしているママは楽しそうだった。」といったように母親と子どもの温かい関わりを目の前で観察したことによって、肯定的な感情を感じたということであった。

一方、否定的な感想には、乳幼児が人見知りをして、学生たちと関わるのが難しかったことが挙げられた。「泣くのをやめさせるなどとても大変そうだと感じた。」「育児はとても大変だと感じた。」といった記述が認められた。

4. 考 察

本研究では、若者が乳幼児と接することが少ない現状から、大学生に対して乳幼児とその母親との交流を行い、ふれあい体験前から乳幼児との関わり経験があるか否かでふれあい体験前後での結果に差が出てくるかどうかについて検討した。

1) 対児感情尺度について

対児感情尺度の好印象となる接近項目について、ふれあい体験後の方が得点が上がり、好印象に変わることによって有意な差がみられた。また、反対に乳幼児に対して悪印象となる回避項目では、交流後の得点の減少から乳幼児への悪印象が減少したことによって有意な差がみられた。

対児感情尺度の項目ごとにt検定を行った結果、「ういういしい」「あまい」「うつくしい」「こわい」は得点の増加から有意な差が認められ、「うるさい」「よわよわしい」からは得点の減少から有意な差がみられた。「ういういしい」に関しては、生まれてまだ間もない乳幼児たちが、新しく触れるものや感情に対して反応する姿に、新鮮な印象を持ったことから、

学生に生じた感情なのではないかと考える。次に「あまい」に関しては、有意差は出ているが、1人ずつ結果を見ていくと前後で同じ結果を書いている人も多々見られた。この現象は、「あまい」という言葉自体が食べ物に使う感情表現から人間に対しては「あまい」という感情がそもそも感じられないのではないかと考える。次に「うつくしい」に関しては、両親が愛し合うことから生命が生まれ、そして人間として逞しく成長していく姿から、その過程を奇跡のように捉え「うつくしい」という言葉に繋がりを持ったのではないかと考える。

次に、「こわい」に関しては得点が減少し、乳幼児に対して「こわい」という感情を持つ学生が交流後に増加した。この理由としては、乳幼児が自身と関わった時に急に泣き出したり、学生が思ってもみなかった行動をする乳幼児に対して、学生自身が乳幼児を傷つけてしまわないかと怯えることから「こわい」という感情が生まれたのではないかと考える。

交流後に得点が減少したものについて、「うるさい」に関しては、乳幼児が大きな声で泣くことにうるさいと思っていたが、実際に関わることによって、乳幼児は言葉がうまく喋れない。そのため泣くことによって自身の気持ちを伝える手段の1つだと気づいたことにより得点が減少したのではないかと考える。

最後に、「よわよわしい」に関しては、まだ未熟な乳幼児に対して弱い存在のように感じていたが、関わることによって、力強く泣く姿や母親にわがままをいう姿を見て、乳幼児でもしっかりと自分を持っている様子から得点が下がったのではないかと考える。

以上の結果から実際に乳幼児と関わることによって前後で印象の差がみられたのではないかと示唆される。

2) 親準備性尺度と親準備教育について

親準備性尺度では乳幼児への印象のほかにも、乳児に対する興味、育児への積極性について、赤ちゃ

んとふれあいの前後での変化から求めた。結果は「乳幼児への好意感情」「育児機会」「育児への自信」で有意差が認められた。「乳幼児への好意感情」に関しては、実際に乳幼児と関わることによって自身が持っていた乳幼児への印象が変わり、好意感情がさらに増加したのではないかと考える。次に、「育児機会」に関しては、身近に小さな子どもがいたにもかかわらず育児を手伝おうと考えたこともなかった学生が、乳幼児と関わることによって、育児を手伝おうと思うようになった学生がいたことから、得点が増加したのではないかと考える。最後に、「育児への自信」に関しては、今回のふれあい体験を通して子育て中の母親から育児に関して話を聞くことにより、上手くあやすことの出来た学生や、母親に教えてもらった遊びによって乳幼児が喜んでいる姿を見て、「自身にも子育てを行うことはできるかもしれない」と思うようになったことから、得点が増加したのではないかと考える。

親準備性尺度と親準備教育に関する項目においては、「赤ちゃんのことにについて知りたいと思う」「育児は人の生きがいである」「育児は辛い仕事だったと思う」「育児をしていると、自分の好きなことができないと思う」「私も育児をやりたい」「普段の生活の中で、子どもをあやしたり、おむつ替えをしたりするなど、乳幼児の世話をする機会がある」の、以上6設問で有意な差が見られた。

最初に「赤ちゃんのことにについて知りたいと思う」に関しては、ふれあい体験を通して乳幼児への興味を今まで以上に持つようになり、女性に関してはもっと赤ちゃんのことを理解して自身が育てる立場になった時に役に立てたいなどの探究心からの結果ではないかと考える。

次に「育児は人の生きがいである」に関しては、現在子育てをしている母親の話聞くことによって、もちろん大変なことが多いのも確かだが、我が子の微笑む姿や愛着の生まれる瞬間などにやりがいを感じるなど生の声を聞くことによって実感したのではないかと考える。

次に「育児は辛い仕事だったと思う」に関しては、先ほど述べた生きがいに関して繋がる場所があり、生きがいを感じるということは同時に苦悩もたくさんあるのだと考える。母親からの子育ての話は全てが良い話ではない。辛かったときや困ったときなども聞くことから、子どもが大好きな人でない限りは否定的な考えにもたどり着いてしまうこともあるが、育児に対して真剣に考えているからこそマイナスの面もしっかり見えてきていると考えられる。

次に「育児をしていると、自分の好きなことができないと思う。」に関しては、母親は、家事に続き育児も行わなくてはいけないことから自身に時間を割くことができないと考え、実際にも子育て中の母親と話していると自身の好きなこと以上に、睡眠すら満足に取れない現状から、取らなくてはいけない時間ですら自由に取れなく、好きなことなどをする時間さえないのだろうと学生たちは話の中で感じた可能性がある。

次に「私も育児をやりたい」に関しては、ふれあい体験学習で乳幼児とふれあい、抱っこなど普段身近に乳幼児がいない限りできない経験もさせてもらったこと、また母親など愛着形成ができてい存在にしか見せない態度を見ることによって「自分自身の子どもが欲しい」「自身の子どもが喋るようになった」「歩くようになった」など愛情を注ぐことにより将来の成長した我が子を見てみたくなったのではないかと考える。

「普段の生活の中で、子どもをあやしたり、おむつ替えをしたりするなど、乳幼児の世話をする機会がある」の項目に関しては、事前アンケート実施後から1ヶ月ほど空けてからふれあい体験を行ったことから、事前準備として、その期間で親戚の子どもと遊んだり、ふれあい体験の前に育児体験を積極的に行った学生がいたのではないかと考える。

以上のことから、乳幼児と関わり、その母親から育児に関しての話を聞くことによって乳幼児の愛おしさや自身も子どもを将来授かりたいというプラス的感情や、育児の大変さを実感し育児に対して真剣

に考えることからマイナス面も見え、今回参加した学生はしっかりと将来の子育てと向き合うことができたことが示唆される。

3) 乳幼児とのふれあい体験の有無による検討

全ての項目で乳幼児とのふれあい体験が「ある」「ない」で分けて分散分析を行った結果、「乳幼児への好意感情」において交互作用が見られ、ふれあい経験がない学生のほうに有意な差が生まれ、ふれあい経験がない学生のほうが、ふれあい経験のある学生より好意的な感情の変化が大きかったことが明らかとなった。このことは、ふれあい経験のある学生にとって「乳幼児がかわいいこと」「育児は大変だけどその先にやりがいがある」という考え方を自身の経験から持ち合わせていることから、大きな差はみられなかったのではないかと考える。また、ふれあい経験を持ったことがない学生にとっては真逆の考えであり、「子どもは突然泣き出して怖い」「育児をしていると自分のやりたいことができなくなる」など否定的な考えを持っていた学生も一部いたためではないかと考える。このことからふれあい経験がない学生は、事前調査の際も項目ごとの合計点はふれあい経験がある学生と比べると全体的に低くなっていた。このような否定的な考えを持った状態からふれあい体験に参加することによって乳幼児に触れ、その母親から育児について生の声で聞くことから、乳児とのふれあい経験がある学生よりも新しい発見が増え、乳児への感情変化が大きかったのではないかと考える。

乳幼児を育てるには、常に大人がそばで見守る必要があること、夜泣きなどでゆっくり休む時間も取りにくいことなどを間近に知って、育児が想定よりも大変だという現実を知る必要がある。近年は、SNSの普及によって育児に関する非現実的なイメージ(見栄えのする離乳食や、片付けられた部屋で過ごす赤ちゃんの姿など)も広く出回っている。そうしたイメージと現実のギャップは、親になった際に、「こんなはずじゃなかった」「自分だけが上手くできないのでは

ないか」とストレスやプレッシャーを感じる要因となるため、乳幼児との生活を通じてそのギャップを埋めることは大きな価値をもつと言える。

乳幼児と接する機会を意識的に増やしていくことは、将来、親となる世代が子どもや家庭を知り、子どもとともに育つ機会を得ることで人への関心や共感力を高めることに繋がる。子育てに肯定的なイメージを持てるような社会になることが、自分たちが育児をするときに育児不安を防ぐために重要だといえる。

引用文献

- 花沢成一 (1992). 母性心理学 医学書院
- 原田正文 (2006). 子育ての変貌と次世代育成支援 兵庫レポートにみる子育て現場と子ども虐待予防 名古屋大学出版会
- 伊藤葉子 (2003). 保育教育の変遷と親準備性 千葉大学教育学部研究紀要 51, 147-154.
- 金谷有子 (2008). 大学生と幼児との世代間交流の重要性についての探索的研究 埼玉学園大学紀要 人間学部篇, 8, 119-127.
- 川瀬隆千 (2010). 大学生の親準備性に関する研究 宮崎公立大学人文学部紀要 17(1), 29-40.
- 国立社会保障・人口問題研究所 (2022). 第16回出生動向基本調査「結婚と出産に関する全国調査」
https://www.ipss.go.jp/psdoukou/j/doukou16/JNFS16_ReportALL.pdf (2023年9月10日アクセス)
- 国立青少年教育振興機構 (2017). 若者の結婚観・子育て観等に関する調査
http://www.niye.go.jp/kenkyu_houkoku/contents/detail/i/111/ (2023年9月10日アクセス)
- 厚生労働省 (2023). 令和4年(2022)人口動態統計月報年計(概数)の概況
<https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/geppo/nengai22/index.html> (2023年9月10日アクセス)
- 三菱 UFJ リサーチ&コンサルティング (2014). 子育て支援策等に関する調査 2014「中高生の意識調査」
https://www.murc.jp/wp-content/uploads/2014/12/press_141208.pdf (2023年9月10日アクセス)
- 佐々木綾子 (2007). 親準備性尺度の信頼性・妥当性の

検討 福井大学医学部研究雑誌 8 (1), 41-50.

W H O : World Health

Organization (2023) .World-health-statistics 2023

<https://www.who.int/data/gho/publications/world-health-statistics> (2023年9月10日アクセス)

謝辞

本研究にご協力いただきましたお母様、お子様、並びにアンケート調査にご協力くださった学生の皆様に心より感謝申し上げます。また、分析にあたりご協力いただきました東戸塚記念病院の平澤優香氏にもお礼申し上げます。

(こたに ひろこ)

【受理日 2023年12月6日】